

トラブル回避の裏ワザも

急増する手元供養の利用者 散骨とのセット販売も始まる

故人の遺骨をペンダント等に入れて身近に置く手元供養は、その手軽さもあり、利用者が年々増加している。

故人の遺骨の一部を入れ物に納めたり、装飾品に加工したりして身近に置いておく、手元供養への関心が高まっている。

主な使い方は二つある。

一つ目は「墓が遠いので墓参りに行けない」という人たちが分骨の骨壺代わりとして使うケース。

二つ目は、大切な人を失い大きな悲しみに襲われている人へのグリー

フ（悲嘆）ケアとして使うケースだ。手元供養の商品は大きく加工型と納骨型に分かれる。

加 工型は遺骨から作るダイヤモンド、インドや、板状のファイインセラ

ミックであるエターナルプレートなどが代表商品だ。一方、納骨型にはペンダントやミニ骨壺、置物などがある。

手元供養の商品は品質もさまざま



最近では墓代わりに利用する人も出てきた手元供養。商品は大きく、加工型と納骨型に分かれる（写真は①エターナルプレート、②遺骨ダイヤモンド、③ミニ骨壺、④地藏型オブジェ）

種類や店はさまざま

2-10 手元供養商品が買える店一覧

ペンダント、ミニ骨壺等	問い合わせ先
メモリアルアートの大野屋	0120-02-8888
未来創想	0120-3737-94
インブルームス	054-260-7001

遺骨ダイヤモンド等	問い合わせ先
アルゴダンザ・ジャパン	0120-253-940
ライフジェム ジャパン	0120-099-152

置物等	問い合わせ先
博国屋	0120-169-281
レイセキ	072-228-6152
エターナルジャパン	03-3846-4380
方丈	0120-816-940

年間需要は2万個以上

2-11 手元供養商品の販売個数推移

販売個数	2003年	2005年	2007年	2011年
	492個	3120個	1万1080個	2万6750個

出所:手元供養協会

であり、中には「インドの化粧瓶を塗り替えてミニ骨壺として売っているような店もある」という。品質は玉石混交だから注意が必要だろう。

NPO手元供養協会の山崎譲二会長（博国屋社長）によれば、手元供養が日本で広がり始めたきっかけは、2001年9月に米国で起きた同時多発テロだった。当時、米国では遺骨を納めるペンダントがはやった。これを日本の業者が輸入販売したところ、一部の人たちの間で口コミによって広がったという。

手元供養協会によれば、03年における主な販売業者は5社、販売個数は約500個だったが、11年には16社、約2万7000個にまで拡大している。「市場規模はいずれ年間死者数の1割に当たる約10万個になるだろう」（山崎会長）と見込む。

手元供養の利用者の多くは、墓を持ちながら、遺骨の一部を手元に置いている。

だが、最近では手元供養を墓の代わりにする人も出てきた。

博国屋では昨夏、手元供養と散骨をセットにした商品を売り出した。手元供養を「自宅墓」とし、残った遺骨は博国屋が粉骨し、故人の家族たちが自ら散骨するというものだ。価格9万2000円は、墓に比べると破格ということもあってか、ひと月で数十件の問い合わせが来たという。今後は墓を持たず、手元供養を墓にするという人が増える可能性もある。

いずれにせよ、大事なことは故人を思う気持ちである。価値観の多様化が進む中、手元供養の利用者は今後さらに増えていきそうだ。